OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代日本における物を介した人間形成の変化 : 人形を巡って
Author(s)	久保田, 健一郎
Citation	大阪大学教育学年報. 2007, 12, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8120
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代日本における物を介した人間形成の変化
－人形を巡って－

久保田 健一郎

【要旨】

本論文は、近代日本における物を介した人間形成の変化を、人形を例に挙げて論じるものである。近代的な子ども観は、明治末期において、玩具を中心とした子ども用の物を介して形成された。そこでは、配置という戦略が大きく機能しており、その結果、子ども用のものを語る際には、教育と切り離して語ることは不可能になった。近代以前の人間形成においては、人形は節句における祓いの役割を与えられており、人間の力を超えた他者であった。近代においては、同情を養ったり、家族や国家の重要性を教える役割を与えられるようになった。近代以降、常に人形は制度化されてきたわけだが、子どもにとって人形とは常に不気味なものであり、現代に残存する他者として人間形成に大きな影響を与えていると考えられる。

1．はじめに

私たちは、子ども用の物を教育との関係で論じる語り口に慣れている。しかし、こうした語り口は、歴史を超えて存在しているわけではない。例えば、喜多村信節が描く江戸の庶民社会では、玩具は子どもの手遊び以上の物ではなく、そこに教育的意義を考えることは出来ない（喜多村 2002)。また、多くの郷土玩具は縁起物としての意味が中心であり、子どもの遊びでさえそこに付随するものだった。すなわち、子ども用の物とは、私たちの理解を超えた広がりを持っていたのである。

本論文では、日本が近代という時代を迎えることで、人間形成における物と人間の関係がどのように変化したかを論じていく。そこで中心となる概念は、人間の力を超えたもの、すなわち他者である。近代以前では、人間形成において物が他者として重要な位置を占めていたが、近代以降はそうした物の位置づけが変化していくことを明らかにする。

本論文では、とりわけ人形を例に挙げる。何故なら、人形は近代における物の位置の変化を象徴していると考えられるからである。まずは、近代的な子ども観が、玩具を中心とした子ども用の物を介して形成されたこと、そして、そこには配置という戦略が大きく機能していたことを論じていく。次に、近代以前の人間形成において人形が他者として重要な位置を占めていたこと、そして、近代の人間形成において人形がそれとは異なる位置を占めるようになったことを論じていく。最後に、こうした変化にかかわらず残存している他者としての人形の可能性を示していく。

2．物を介した近代的子ども観の成立

①子どもの誕生と児童博覧会

周知のように、アリエスは、子どもは西洋において中世までは「小さな大人」と見なされており、近代に至ってはじめて誕生したことを明らかにした（アリエス 1980)。こうした子どもの誕生の結果として、子ども服、子ども用玩具のような子ども用の物が作られるようになった。こうして子どもは、子ども用の物に囲まれながら生きていくことになったのである。

日本においては、柳田国男によれば、明治以前は子どもには神の代役といった社会的な役割が与えられていた（柳田 1998)。明治初頭に学制が整えられ、子どもが社会から切り離されることで、はじめて教育の対象としての子どもが誕生した。この子ども観は、当初は一般には根付いていなかったが、明治20年代頃には児童文学や少年向け雑誌が現れ、教育学者や心理学者によって児童が専門的に研究されるようになった[1)]。また、育児書に子ども服に関する記述が増え始めたのもこの頃からである（高橋 1992、65頁)。そして、この子ども観が庶民の生活の深くまで浸透する過程で大きな意味を持ったのが、明治30年代末

から度々開かれた児童博覧会である。是沢優子によれば、明治39年に日本で最初に開かれた「こども博覧会」は、「学校教育の面からだけでなく、家庭教育や娯楽をも含めた子どもの生活全般を視野に入れた」（是沢1995、164頁）ものであった。子どもの誕生は、日本においても子ども用の物の誕生をもたらしたわけだが、この「こども博覧会」はこれらの物を展示することで、「児童の生活や教育上の新しい知識を普及する」（前掲書、161頁）ことを目的としたものである。中村喜代子によれば、そこでは「こどもに必要な最新の設備が、一定の基準の下に可視化され」たのである（中村1998、230頁）。「こども博覧会」では、確かに子どもがつくった物も展示されてはいたが、子ども用の物の展示が中心であり、子ども（観）を可視化する試みという点で、その後の博覧会の方向性を指し示すイベントだったと言える[2)]。

明治42年4月に開催された「第一回三越児童博覧会」は、多くの児童博覧会の中でも代表的なものである[3)]。百貨店の三越は、当時、最先端であった子どもというテーマに注目していた。そこで、この博覧会において展示された子ども用の物を通してあるべき子ども像を表現し、庶民を啓蒙する方針を打ち出したのである[4)]。同年5月には、三越の知的サークルの児童用品研究会が発足し、児童文学者の巌谷小波、児童心理学者の高島平三郎らが発起人となり、人類学者の坪井正五郎、画家の黒田清輝、その他、新渡戸稲造らが集った（是沢1997、133-134頁）[5)]。この研究会はメンバーの多忙にもかかわらず、頻繁に例会を開き、玩具から食用品に至るまでの児童用品の研究開発、批評、普及を精力的に行った。この会で蒐集、研究された子ども用品は各地の児童博覧会にも出品されたことからも、この会の及ぼした影響がわかるだろう。また、この博覧会では、児童用品研究会のメンバーが審査員となり、出品された物が子どものためになるかどうかが評価された。こうして、子ども用の物は子どものためという抽象的な基準の下で秩序立てられるようになったのである。

また、この教育の対象としての子どもは同時に消費の対象でもあった。吉見俊哉は「生産者としての児童ではなく、消費者としての児童こそが、今、百貨店が必要とする相手だった」（吉見1992、162頁）と述べ、この博覧会が子どもという新しい市場を開拓するものだったとしている。この教育と消費が密接に結びついた子どもへの関心は、子どもを大切にするということが、子ども用の物を与える行為によって表現されるまでに至った[6)]。すなわち、当時の子どもへの関心は子ども用の物への関心へと収斂していったのである。消費によって子ども用の物を並べることで、親の子どもへの関心を可視化するようになったのである[7)]。

②二つの子ども観の混淆と別離

前節で述べた、教育対象としての子どもへの関心が子ども用の物への関心へと収斂したことは、そうした子どもへの関心が日常生活に浸透していったことを示している。学制が始まった後でも、柳田国男が描くような近代以前の子ども観は、日常生活では強固に根付いていたかもしれない。しかし、近代的な子ども観の浸透するにつれて、近代以前の子ども観は次第に圧迫され、人々の記憶の片隅にしか存在しない郷愁の対象となったのである。

こうしたことから、この時期において、近代以前の子ども観に希望を託す、子どもへの郷愁的関心が現れてきた。すなわち、教育的な子ども観と、それに抵抗する郷愁的な子ども観が混在するようになったのである[8)]。こうした傾向は上述の児童用品研究会の中に見られる。山口昌男が「児童博覧会に結集したエネルギーは、玩具を媒介とすることによって、西洋的身体と土俗的身体の双方に仕えることのできる〈もの〉の発見という方向に向けられていた」（山口2005、138頁）と述べるように、児童研究の最先端である三越の知的サークルの中では教育（西洋）と郷愁（土俗）の両者が混在していた。また、両者は必ずしも対立しておらず「不思議な同居」（神野1999、181頁）がなされていたのである。

この二つの子ども観はそれぞれどのようなものだったのだろうか。児童用品研究会における教育的関心の代表的人物は高島平三郎であろう。高島は元来小学校教師であり、教育的な観点から子どもに関心を向けていた。彼は心理学を独学で修得した後、心理学の重鎮の元良勇次郎の教えを受けた。その後、明治31年に創刊された学術雑誌『児童研究』の中心人物となり、松本孝次郎、塚原政次らアカデミズムの研究者とともに黎明期の児童研究を牽引したことは周知の事実である。こうして高島は児童用品研究会に教育的学術的な要素をもたらしたのである。

他方で、郷愁的関心は巌谷小波や坪井正五郎に見られる。彼らに流れ込む郷愁の源流を辿ると、作家、評論家の淡島寒月や、郷土玩具蒐集家の清水晴風の名前が挙がる。巌谷や坪井は、こうした江戸文化や郷土文化に精通した知識人の影響を受け、児童用品研究会に土俗的郷愁的な要素をもたらしたのである。また、晴風自身も児童用品研究会に加わった期間もあり、自ら蒐集した玩具を展示していたことからも、この会の特色が理解できるだろう。

このように、この時代には教育的関心と郷愁的関心という二つの思想が、物に関する議論の中で、前者は子ども用の物の適切な配置、後者は郷土玩具の蒐集といった戦略として機能し始めたのである。しかし、後の大正時代の玩具研究家、天沼匏村が「今日では子供の玩具というよりもむしろ好事家の蒐集するところとなってゐるかの観があります」（天沼 1914、63 頁）と述べているように、次第に郷土玩具は子どもの教育から姿を消し、大人の間での蒐集の対象としてのみ流行した。また、前述のように、この頃教育は消費と接続し、大人は消費によって教育的関心を表現するに至った。消費において、当初は教育と郷愁は混在していたが、教育的関心を表現するために物をより精密に配置することが必要となり、土俗の薫りのする蒐集は排除されるようになった。こうして教育は郷愁に別れを告げざるを得なくなったのである。ここにおいて、教育は子どもへ、郷愁は大人へと、それぞれの場所に住むことを余儀なくされた。それ以降、子ども用の物を語る際には、教育と切り離して語ることが困難になったのである。

3．人間形成と人形

①教育玩具の時代

前章で見てきたように、近代的子ども観は物を介して形成されたわけだが、教育的子ども観が隆盛するにつれ、適切に配置された物との関係によって教育が行われるべきとされた。こうして近代以前の子ども観の名残である郷愁的子ども観は後退し始めるのである。こうして近代的子ども観は教育的子ども観と同義になったのである。本章では、こうした変化を最も象徴的に現している子ども用玩具、とりわけ人形の人間形成における位置の変化について論じていく。では、そもそも子ども用玩具はどのように語られていたのだろうか。

江戸時代までは、玩具は子どもの手遊びの道具以上の物ではなく、そこに教育的価値を見る論はあり得なかった。明治時代に入ると、政府の欧米視察の結果、大久保利通は郷土玩具[9]の非科学性を嘆き、教育的な玩具の奨励に乗り出した。郷土玩具は信仰や縁起に基づいており、故に非教育的であるという烙印が押されたのである。後にフレーベルの恩物が輸入され、玩具の教育的効果が注目されるようになる。しかし、玩具業界は、教育玩具を奨励する政府の働きかけにもかかわらず、販売効果が望めないことからその生産に消極的であった。しかし、20 年代後半になると次第に「玩具は児童の心身の成長の糧として必要なものであるという社会認識」（斎藤 1971、54 頁）が通念となった。30 年代に入ると高島平三郎や松本孝次郎が雑誌『児童研究』において玩具の研究を立て続けに発表し、都市部の新中間層を読者とする『家庭雑誌』において、玩具の教育的意義が啓蒙され始めた。36 年になると玩具業界に「教育玩具旋風」（日本金属玩具史編集委員会 1997(1960)、132 頁）が吹き荒れ、「教育玩具でないものは玩具に非ず」（前掲書、134 頁）と言われるようにまでなった。その年の『東京雛玩具商報』の広告文は、「教育玩具」の文字で満たされていたのである。すでにこの頃には「識者、児童および家庭、業者と三位一体となって良質な玩具を求めようとする機運に燃えていた」（前掲書、191-192 頁）のである。

こうして教育玩具は、人間形成において郷土玩具を駆逐するに至ったのである[10]。教育玩具の隆盛の背後に配置の思想があることは言うまでもない。配置から人間形成を考えていた高島平三郎は、明治 44 年に著された『教育に応用したる児童研究』や「玩具選擇の注意」において、幼児期の玩具を年齢と心理の観点から綿密に分類し、教育的関心から秩序付けている（高島 1985（1911）、227-290 頁、1911b、421-423 頁）。そこで挙げられている玩具は、鳥笛、羽子板など近代以前からあったものも多い。しかし、鳥笛は嬰児後期で聴覚を養うための物、羽子板は幼児後期で注意力を養うための物と規定し、縁起物として意味を排除することで、教育的関心から子どもの周りに配置し直されるのである。

では、こうした玩具観の変化の中で、人形はどのような位置を占めていたのだろうか。高島平三郎は明

治44年から『児童研究』に「人形ノ研究」「玩具に就いて」といった人形研究の成果を立て続けに発表した。配置の思想の代表的人物である高島が、この時期に人形研究に傾倒していた事実は看過できない。また、大正2年には、西山哲治が私立帝国小学校内に「人形病院」を開設し、子どもの教育における人形の重要性を世間に知らしめたことは周知の事実である。大正10年代になると、倉橋惣三が幼児教育における人形劇の意義を説き始め、菊池ふじのの「人形の家」などによって実践化されたことも有名である[11]。

このように明治末期の1910年代から、人形は子ども用玩具の中で重要な位置を占めるようになった。何故、これほどまでに人形に注目が集まったのだろうか。次節以降では、人形の人間形成における位置づけの変化について考察していく。

②教育以前の人形

まずは近代以前の人形の歴史について、民俗学などの成果を参考に概略しておく。

西洋における人形の歴史はどのようなものであろうか。アリエスは「玩具史家ならびに人形やミニチュア玩具の蒐集家は、子供の玩具である人形を、他のさまざまな聖像や小立像と判別するにあたって、いつもひとかたならぬ腐心を重ねる。･･･また多くの場合、家庭内での祭祀用もしくは葬儀用祭祀、巡礼者の奉納物など、宗教的意味を有していたものである」（アリエス 1980、67頁）と述べ、人形が宗教的意味を持っていたとしている。高島平三郎も、西洋の玩具の歴史的分析の中で、玩具には玩弄の対象としての「愛ノ系統」と信仰の対象としての「敬ノ系統」の二つがあるが、はじめは「敬ノ系統」がであったものが、信仰が失われることによって「愛ノ系統」に変化するとしている（高島 1911b、203頁）。また、山田徳兵衛（十世）も「人形をもって子供を授かったり、敵の矢を避けたり、山の獲物をえたり、害虫を除いて穀類をみのらせたりすることは、世界の各地にみられているそうである」と述べている（山田 1984、22頁）。すなわち、西洋において人形とは、元来、宗教的な意味を持っていたのであり、玩具としての意味はその後に現れたことがわかる。

では、日本においてはどうだろうか。高島平三郎は貝塚から発掘された人形について「恐ラクハ宗教上ノ事ニ用ヒラレタノデアロウ」（高島 1911c、298頁）と述べている。折口信夫も「もとはやはり、信仰上の對象として、生まれたものには違ひはないが、祭りの中心行事に人形を與ることは、平安朝あたりから近世までは證據がある」（折口 1966、50頁）と述べており、日本においても西洋と同様に宗教的な意味を持っていたと考えられる[12]。また、折口信夫は、日本において人形は病気や天災などの祓いに使われており、こうした人形の使われ方が全国的に広がっていたことも明らかにしている。

江戸時代になると、山田徳兵衛（十世）によれば、「縁起物でもあり、玩具でもある人形が多くなってきた」が、「初めから子供に与えようと買っていく玩具であっても、子供が病気をしないお守りになるとか何かの功徳のある玩具でなければならなかった。都市の一部の人々はともかくも、一般の人が銭を出して、子供の遊びだけの人形、玩具を買うようになるのは、明治以降のことだといってよい」（山田 1984、40-41頁）。すなわち、江戸時代までは、宗教以外の意味も現れつつあるが、人形は常に祓いの思想と結びついていたのである。

また、高島平三郎が「現在ニ至ルマデ行ワレテイル我國ノ人形ハ、雛祭ト密接ナ関係ヲ有シテイル」（高島 1911d、298頁）と述べているように、日本において特徴的なことは、子どもの病の祓いとしての人形が、雛祭りの際の雛人形として根付いたことである。すなわち、人形が雛祭りのような節句に位置づけられたのである。雛祭りの起源は民俗学においても明確ではないので、折口信夫が人形を流すことで祓いを行っていたが、それが家にまつるようになって後の雛祭りが生まれたと述べていることを確認するにとどめる（折口 1966）[13]。こうして誕生した雛祭りは、初めは雛遊びとして宮廷で行われていたが、次第に3月3日という日付が明確にされ、江戸時代になると今日のような形式の雛祭りが行われるようになり、庶民の生活に浸透していったとされている。

すなわち、人形は雛祭りのような節句において祓いの役割を果たしていたのである。その意味では、人形は明治政府に縁起物として否定された玩具の機能を、象徴的に現していたと考えられる。人形が司っていた祓いとは、人間が決して手にすることが出来ない力であり、故に人形とは人間にとって他者だったと言える。ということは、教育以前の人間形成では、人形における祓いに象徴される、絶対的な他者性が大

きな意味を持っていたと考えられないだろうか。近代以前は節句における祓いにおいて、人生が区切られることで人間形成が可能になり、その際に大人たちが子どもの健やかな成長を願うことで世代関係が成立したのではないだろうか[14]。

3.3 教育玩具としての人形

こうした人形の位置に変化が訪れる。その分岐点として、明治6年の節句の廃止も考えられるかもしれない。明治政府は五節句（人日、上巳、端午、七夕、重陽）を廃止し、紀元節と天長節を定めることで因習的な文化を葬り去ることを試みた。その際、雛祭や雛人形も衰退の危機に曝された。しかし、岡倉天心やフェロノサらによる日本美術復興の動向と共に、雛人形の芸術性が注目され、雛祭りは実質的に公の節句となったのである。山田徳兵衛（十世）の言葉を借りれば「政府が、根強い民間の習俗に屈した」（山田1984、100頁）のである。人間と人形の関係は、政府による政策で変化するようなものではなかったのである。

このように考えると、人形の位置の変化は、より後の時代のものと言える。そこで考えられるのは、子ども用の物が配置によって語られるようになり、教育玩具隆盛の時代となった明治末期である。この時期の子ども観の変化、すなわち子ども用の物を配置によって語るようになったことによって、人形の位置が変化したと考えられるだろう。よって、本節では、この時期に著された1911年の高島平三郎の『教育に応用したる児童研究』、「家庭教育より見たる雛祭」、「人形ノ研究」、1914年の「玩具に就いて」を解釈することで、1910年代における人形の位置の変化を考察していく。

『教育に応用したる児童研究』では、配置の思想が貫かれている。そこで描かれた玩具選択の一覧表を見ると、人形は「同情を養ふ玩具」（高島1985、277頁）として配置されている[15]。とりわけ「妹や子供の取り扱ひに慣れさせる點に於いて、人形は女の子の玩具として最も適當である」（前掲書、278頁）と述べており、女性に子育てを学ばせるものとしている。また、「玩具に就いて」では、子どもが人形で遊ぶ理由について、「真似をすること、自分の権力の下に支配して見たいということ、自然に人に興味を持つこと」（高島1914c、261頁）を挙げている。すなわち、人形には、理解を前提とした人間の代役という役割が与えられるのである。ここではかつて人形が有していた祓いの力は忘れ去られ、人間を理解するための道具として配置される。

他方で、「家庭教育より見たる雛祭」と「人形ノ研究」では、教育以前の人形への注目も見られる。「人形ノ研究」は人形の歴史的、人類学的研究であるが、そこで雛人形について言及している。高島は雛人形の起源を、天児という「子供ノ災難ヲ祓ウ為ノ守リデアル」（高島1911d　298頁）と述べ、雛祭りのように「是ラノ人形ヲ母子相傳ヘテ所蔵スルト云フヨウナコトハ、世界各國ニ例ノナイコトデ、我國特有ノ美風デアル」（前掲書、299頁）として、明治政府に批判された縁起物として玩具の教育的意義を認めている。

では、こうした縁起物としての人形は、高島にとってどのような意義を有しているのだろうか。「家庭教育より見たる雛祭」では、雛祭りについて「日本のやうにちゃんと時を極めて、さうしてあの通り雛壇を作つて種々な道具を以て綺麗に飾つて、さうして女の子が自分で働いてお客をするなどと云ふやうな、優美な麗しい風は世界萬國に類のないことであります」と賛美し、「是を教育上から考へて見ますと私は非常に良き風俗であると思ひます」と述べ、節句の教育的意義を強調している（高島1911a、73頁）。

その理由として、高島は「先づ第一に大きい立場から考へて見ると雛祭は我國の國體と云ふことと関係を持つて居ります」（前掲書、73頁）と述べている。すなわち、高島は、雛祭りを国家に対抗する民間習俗と見ていた山田とは異なり、国家との密接に関連において捉えている。また「斯う云ふ昔の風俗を其儘に存して、夫を親が子供に話して聞かせると云ふことは實に麗しい風俗であつて」（前掲書、73頁）、「兎に角此の雛と云ふものは國家と共に此の家の歴史に關係して居ます」（前掲書、74頁）とも述べている。また、「雛祭と云ふことに依つて自分の家の歴史なり或は昔からの日本の國體、君臣の關係などと云ふことを説いて聞かせるには最も宜しい時であると思ひます」（前掲書、75-76頁）とも述べており、高島は雛祭りを国家や家族の歴史を伝える機会として考えていることがわかる[16]。

このように、高島にとっての雛祭り、そして雛人形は、国家と家族を教えるための道具なのである。人形の縁起物としての人間形成的意義は、祓いのような人間の力を超えた他者との関わりではなく、国家や

家族の大切さを啓蒙する機会という極めて世俗的な意味に切りつめられたと言えよう。人形は、このような役割として新たに配置し直されるのである。

こうした雛祭りや雛人形の語り方は、高島が主張していただけではなく、少なくとも都市部には一般に広まっていたようだ。古城絵里香は明治末期の婦人雑誌『家庭雑誌』『女鑑』における雛人形の記事についての研究で、「雛人形が家族の歴史を語り継ぐものとしてあった」こと、そして「人形が世代にまたがり受け継がれた様子、つまり人形が家族の歴史となっていく」（古城 2004、15-16 頁）ことを明らかにしている。また後の時代の朝鮮侵略や太平洋戦争においては、雛祭が「愛国的行事」（前掲書、18 頁）になっていたことも論じている。雛祭り、雛人形が国家や家族の大切さの啓蒙のための道具となっていた事実は、これらの雑誌を読む新中間層にも浸透していたことがわかるだろう[17]。

このように考えると、山田徳兵衛（十世）が節句について国家が「民間の習俗」に屈服したと述べているが、実際は節句は国家に奪われてしまったのではないか。その結果として、雛祭り、雛人形は、民間の人々に家族や国家の大切さを啓蒙する場として利用されるにまで至ったのである。山田は「雛祭をする親たちの気持ちのうちには娘の成長、娘の良縁への願望をほのかに秘めているのには違いないが、めでたく、たのしく雛祭をしようというので、道義的な考えからするのではなかったのである」（山田 1984、122 頁）とも述べている。明治時代になるとこうした雛祭りの受動的な側面は後景に引き、人間が雛祭りや雛人形を積極的に支配し、利用する、すなわち配置するようになる。そこでは当然、節句や人形に含まれていた他者としての意味は失われていくのである。配置においては、他者の居場所はないのである。

4．おわりに　－人形の行方－

以上の考察から、近代という時代を迎えることで、人間形成から物を介した他者との関わりが排除されていくことが明らかになった。縁起物としての玩具が有していた人間を超えた力が、次第に人間形成における場所を喪失していったのである。しかし、人間形成において他者は完全に排除されたのだろうか。最後にこの点について考えてみたい。

和田修司によれば、戦後教育は教育の場から超越的なものを追放し、世俗教育に限定してきた（和田 1985）。しかし、これまでの考察から、超越的なものの追放、すなわち他者の追放は戦後から始まったことではないことがわかる。政府は、明治初頭から、節句の廃止、あるいは郷土玩具の否定と教育玩具の賛美によって、民間習俗が有する荒々しい他者性を追放してきたのである。確かに、戦前においては他者は完全には追放されず、国家、とりわけ天皇に表象されてきたかもしれない。実際に、内裏雛は天皇と皇后を表象していたのである。しかし、ここでは他者はすでに制度に取り込まれている。制度化され、国家の利益に利用される他者は、すでに他者とは言えないだろう。

増淵宗一は、「戦前において人形は、学校教育と家庭教育の両面から良妻賢母主義教育の華麗な主役として踊らされた」が、戦後においては「小学校教育と人形の緊密な関係はほぼ寸断され、少女人形や人形遊びは学校教育の圏外において独自の歩みを辿ることになる」（増淵 1996、16 頁）と述べている。こうして人形は、消費社会の中で、誰でも耳にしたことがあるような様々なブランドの名を被せられて、戦前とは異なったかたちで人間形成の傍らに置かれることになった。そこには消費という制度に取り込まれた人形の姿があり、人形劇などの散発的な実践を除いて、教育の配置からは外されている。明治以降、人形は戦前は国家、戦後は消費というそれぞれの制度のもとで踊らされてきたのである。

しかし、実証的に制度化の側面を見るだけで、人形と人間形成の関係について十分に語ることができたと言えるのだろうか。私たちは幼き日々に、神社で釘を打たれた藁人形の残像に夜毎苦しめられた記憶、河原に打ち捨てられた大量のマネキンを目にしてその不気味さに母の手を握った記憶、首を切られ胴体のみの汚れた人形の不気味さに涙した記憶といった、人形にまつわる数々の記憶が持っているだろう。こうした不気味さは、人形だからこそ現れるものではないか。あるいは、お気に入りの人形を踏みつけられたとき、その子に殴りかかり大人から怒られたとしても、決して反省しなかったことをあるかもしれない。そのことは、人形を通して人間への「同情」を学び、社会性を養うというレベルとは異なる感情を育てられたということであろう。たとえ大人から何らかの「教材」として与えられた人形でさえ、子どもはその

不気味なものを縁起物として受けとるしかないのではないか。こうした不気味なものとしての人形が、現代に残存する他者として、人間形成に大きな影響を与えているのではないだろうか。

【注】

1）例えば、帝国大学に小児科が設置されたのは明治20年、恋愛小説家だった巌谷小波が、『こがね丸』によって児童文学に足を踏み入れたのが明治24年、高島平三郎らが児童研究組合を結成したのが明治28年である。

2）この博覧会において、当時日本には存在していなかった子ども部屋が展示されていた点も注目に値する。中村は「仮想空間を展示することで、よりリアルに提示していったのではないだろうか」（中村1998、230頁）と述べている。

3）三越の児童博覧会は明治42年から大正10年まで合計九回開かれている。

4）この点に関して中村は、この児童博覧会は「子どもという存在に着目し、これを取り巻く生活のすべてを網羅しようと、具体的に部質（ママ）的な側面から提示しようとするものだった」（中村1997、227頁）と述べている。百貨店によるライフスタイルへの教育力に関しては、世界初のデパート「ボン・マルシェ」についての鹿島茂の研究が有名である（鹿島1991）。

5）また、それに先だって明治38年に巌谷らをメンバーとして「流行会」が結成されていた。「流行会」は流行や風俗について議論し、三越の戦略の先導した（神野1994）。この『流行会』の提案によって児童博覧会が開催されたのである（三越2005、73頁）。その後児童用品研究会は「みつこしオモチャ会」「児童用品展覧会」など次々とイベントを開催し、子ども観の形成に大きな役割を果たした（同上81,88頁）。

6）神野由紀によれば、高島平三郎は「親が子供に示す愛情の証が子供のための消費であること」を強調していたのである（神野2005、74頁）。この点は、注16の高島の発言からも明らかである。

7）沢山美果子も岡山の児童博覧会の事例から、子育てへの情熱により、「〈子ども〉が資本主義的商品化の対象となる時代の始まり」を見ている（沢山1990、111-113頁）。こうした傾向が、都市部のみならず、地方まで広がっていたことがわかる。

8）二つの子ども観の先行研究であるが、教育的関心については、教育玩具研究という意味では教育学において数多く論じられている（是沢1994、永田1984など）。郷愁的関心の研究は、教育学ではほとんど見当たらないが、他分野では散見される。山口昌男の明治期の反体制知識人の研究では、淡島寒月を大きく扱っており、晴風、巌谷、坪井も論じられている（山口2005）。また、神野由紀の明治期の子ども用品研究は、両者の関心を包括的に扱っており、大いに参考になった（神野1995、93-102頁など）。齋藤良輔の一連のおもちゃ研究も両者を包括的に扱っており、資料的価値の高い著作になっている（齋藤1971）。

9）正確に言えば、当時は「郷土玩具」という語は存在しなかった。その言葉が使われるには、1912年の田中緑紅を待たなければならない（齋藤1971、159頁）。

10）こうした状況下において、上述の郷愁的関心の側の抵抗も見られた。清水晴風は、明治13年に「竹馬会」を結成し、衰退の危機にあった郷土玩具を蒐集することで、伝統文化を掘り起こすことを試みた（齋藤1971、60頁）。また、晴風は明治24年に郷土玩具の画集『うなゐの友』を出版し、子ども用玩具を通して郷愁を表現した（清水1891-1924）。

11）このように高島平三郎は1910年代に人形について集中的に論じているが、高島の人形論に焦点を当てた先行研究は、ジェンダー形成の視点から当時の人形研究を概括した金子省子の研究のみである（金子1997）。西山哲治についても金子の概括のみである。倉橋惣三の幼児教育への人形劇導入に関しては斎藤尚子の研究に詳しい（斎藤　1989, 1990, 1992）。また、高月教恵は菊池ふじのの「人形の家」の実践記録から、倉橋惣三の理論について考察している（高月2000）。

12）とはいえ、その頃には人形という語は存在しなかった。山田によれば、人形は平安時代には「撫で物、形代、天児」などと呼ばれており、室町時代になって初めて定着したのである（山田1984　21頁）。

13）山田徳兵衛（十世）も「古代、人形で体を浄めて、そのあとで川に流したりしたと伝えられるが、近世にもみられる前記のような雛流しは、その名残の一端でもあろう。それが、いつのころからか、どういうわけからであったのか、人形を流すことよりも、この節句に人形をこしらえて、その人形と遊ぶことに楽しみがもたれるようになったのである」（山田1984、112頁）と述べるにとどめている。

14）こうした節句によって区切られる人間形成として、通過儀礼を思い浮かべるかもしれない。柄谷行人は、江藤淳が重視する「成熟」とは近代に限定されたものと述べた後、「人間社会一般に見られる〈通過儀礼〉（成人式・元服式）は、〈成熟〉とは全く異質である。…通過儀礼において、子供が大人になるのは、いわば仮面をぬぎかえることであって…髪型、服装、名前などを変え、刺青、化粧、割礼などをほどこすのである。それらを通して、

人は別の自己となる」（柄谷 2004、175 頁）としている。その意味では近代的な人間形成とは異なっているかもしれない。しかし、矢野智司よれば「通過儀礼は神話を学び、聖なるものに触れるという意味において、世俗的な儀式とは根本的に異なる宗教的儀式である。しかし、通過儀礼での〈死と再生〉の儀礼が参入者にもたらすものは、共同体の一員としての生まれ変わり以上のものではない」（矢野 2000、49 頁）。すなわち、通過儀礼とはあくまでも社会化としての人間形成であり、そこでは他者も社会化の道具に過ぎない。その意味では、後に述べる近代的な人間形成と同様であり、近代以前と近代の断絶を見る本論文とは立場を異にする。

15) 高島平三郎の同情概念については、飯田宮子の研究がある。飯田によれば高島にとって同情とは「他者の苦楽の表出を見聞して、自己もこれと同様に苦楽を感じる作用」であり、故に「人が社会生活を営む上で不可欠なもの」（飯田 1997、3 頁）である。

16) その他、高島は「幾ら親子の間でも自然の愛情ばかりでは足りませぬ。子供にちゃんと具体的に實際の上から愛情を働かせて見せてやることが必要です」（高島 1911a、76 頁）、あるいは「自分が毎日一合飲む酒を五勺にしても子供の為に一つのお雛様でも買つて遣ると云ふことがあつてこそ心から親の有難いことを子供に感ぜしむることが出来るのです」（前掲書、77 頁）と述べていることから、この時期において物を買い与えることで子どもへの関心を示すようになったこともわかる（注 6 参照）。また、「雛祭は又美の觀念を養わしめるには誠に好き機会であります」（前掲書、80 頁）と述べ、雛祭りを通して色合いなど「趣味の教育」を行うことを説き、「趣味の深い家の子供は必ず趣味が深い」（同上）と述べている。高島はこうした雛祭りの特徴を、「日本の國體」「孝の觀念」「兄弟の友情」「経済の觀念」「美の觀念」の五つを教育する機会と考えている。

17) ここでの家族とは、女性が家事労働を引き受ける近代家族であり、人形がジェンダー形成に利用されていたことも注目に値する。古城は、明治では雛祭りを通して「夫に逆らうことがなく、家庭内を切り盛りできる女性を理想像とし、遊びを通じて家事、育児などを自然に身につけさせようとした」（古城 2004、13 頁）と述べている。古城はとりわけ雛人形の保存方法の記述に注目し、「雛人形の保存を通じて経済的であることは女性によって重要な心得であるという教育的意味が高かったようである」（前掲書、15 頁）と述べ、「良妻賢母を実現する手段」（前掲書、18 頁）だったとしている。また、金子省子は高島、倉橋、西山らの人形論を概観し、「女性の本能とその発現とみられた女児の人形遊びへの嗜好・興味を前提として、人形を〈母性本能〉と結びつける傾向が指摘される」（金子 1997、173 頁）と、人形とジェンダー形成の関係に注目している。

他方で、佐野茂は宮崎県の明治後期生まれの女性の調査で、雛祭りが「家族水入らず的な交流」よりも、「地域住民が参加しての団欒であり人間形成機能であった」ことを明らかにしている（佐野 1998、139 頁）。ということは、この時期、地方では家族の大切さの啓蒙やジェンダー形成に利用されるには至ってなかったことがわかる。また、そもそも雛祭りが少女の節句となったのも江戸時代後期からであることも忘れてはならないだろう（山田 1984、117 頁）。

【引用・参考文献】

天沼匏村　1914 『玩具の話』 芸艸堂.
アリエス　1980 『〈子供〉の誕生』 みすず書房.
淡島寒月　1999 『梵雲庵雑話』 岩波書店.
飯田宮子　1997 「高島平三郎の心理学研究 (6)：同情の解釈」『日本教育心理学会総会発表論文集』Vol.39　3 頁.
折口信夫　1971 「雛祭りの話」『折口信夫全集第三巻』中央公論社　47-54 頁.
鹿島　茂　1991 『デパートを発明した夫婦』 講談社.
金子省子　1997 「玩具とジェンダー・ステレオタイプに関する史的考察：人形論の分析」『愛媛大学教育学部紀要. 第 I 部, 教育科学』Vol.44-1　165-175 頁.
柄谷行人　2004 『日本近代文学の起源［増補改訂版］』 岩波書店.
喜多村信節　2002 『嬉遊笑覧３』 岩波書店.
是沢博昭　1994 「幼児教育普及に伴う玩具観の変容　－〈玩具教育観〉の受容から浸透まで－」『児童研究』Vol.74　16-25 頁.
是沢博昭・是沢優子　1995 「教育玩具の時代　－児童文化誕生前史－」『かたち・あそび』Vol.7　149-162 頁.
是沢優子　1995 「明治期における児童博覧会について (1)」『東京家政大学研究紀要 1　人文社会科学』Vol.35　159-165 頁.
是沢優子　1997 「明治期における児童博覧会について (2)」『東京家政大学研究紀要 1　人文社会科学』Vol.37　129-138 頁.
斉藤尚子　1989 「保育における人形劇の史的検討　1. 保育に人形劇を導入した倉橋惣三」『東京家政大学研究紀要』Vol.29　63-70 頁.
斉藤尚子　1990 「保育における人形劇の史的検討　内山憲尚による人形劇団の創設と普及活動」『東京家政大学研

究紀要』Vol.30　73-80 頁．
斉藤尚子　1992 「保育における人形劇の史的検討　雑誌「保育研究」によって普及活動をした山内勇仙」『東京家政大学研究紀要』Vol.32　91-100 頁．
齋藤良輔　1971 『おもちゃの話』 朝日新聞社．
佐野茂　1998 「家庭生活における「一家団欒」の社会史的考察 (3) 土雛人形を中心とした庶民家庭における三月節句の教育的意義」『梅光女学院大学論集』Vol.31　131-140 頁．
沢山美果子　1990 「教育家族の成立」『〈教育〉ー誕生と終焉』 藤原書店 108-131 頁．
清水晴風　1891-1924 『うなゐの友』 芸艸堂．
神野由紀　1994 『趣味の誕生　百貨店がつくったテイスト』 勁草書房．
神野由紀　1995 「市場における〈子供の発見〉 子供のためのデザイン成立とその背景に関する一考察 (1)」『デザイン学研究』Vol.42-1　93-102 頁．
神野由紀　1999 「百貨店の子供用商品開発」『百貨店の文化史』 世界思想社　178-196 頁．
神野由紀　2005 「近代日本における商品デザインの展開ー明治～昭和初期の子ども用商　品を例に」『デザイン理論』Vol.46　67-81 頁．
高島平三郎　1911a 「家庭教育より見たる雛祭」『三越』Vol.1-2　70-81 頁．
高島平三郎　1911b 「玩具選擇の注意」『児童研究』Vol.12-11　421-423 頁．
高島平三郎　1911c 「人形ノ研究」『児童研究』Vol.14-7　203-207 頁．
高島平三郎　1911d 「人形ノ研究（二）」『児童研究』Vol.14-10　295-299 頁．
高島平三郎　1911e 「人形ノ研究（三）」『児童研究』Vol.15-7　3-8 頁．
高島平三郎　1914a 「玩具に就いて」『児童研究』Vol.17-5　177-179 頁．
高島平三郎　1914b 「玩具に就いて」『児童研究』Vol.17-6　219-222 頁．
高島平三郎　1914c 「玩具に就いて」『児童研究』Vol.17-7　260-261 頁．
高島平三郎　1914d 「玩具に就いて」『児童研究』Vol.17-8　295-298 頁．
高島平三郎　1914e 「玩具に就いて」『児童研究』Vol.17-9　330-333 頁．
高島平三郎　1985 『教育に応用したる児童研究　日本児童問題文献選集 29』 日本図書センター（1911 年の復刻版）．
高島平三郎　1990 『家庭教育講話』クレス出版（1903 年の復刻版）．
高月教恵　2000 「倉橋惣三の誘導保育論の実際　菊池ふじのの「人形の家を中心にして」の実践記録をとおして」『新見公立短期大学紀要』Vol.21　31-41 頁．
高橋知子　1992 「明治期の育児観と子ども服 1. 育児書を中心に」『愛知学泉大学研究論集』Vol.27　65-76 頁．
永田桂子　1984 「児童文化研究の一視点 2　幼児玩具理論の変遷と研究の課題」『武蔵野女子大学紀要』Vol.19　119－128 頁．
中村喜代子　1997 「近代日本における〈こども〉イメージとこども博覧会　ー三越におけるこども博覧会の濫觴ー」『美術教育学』Vol.18　215-225 頁．
中村喜代子　1998 「近代日本における〈子ども〉イメージとこども博覧会　ーこども博覧会の端緒についてー」『美術教育学』Vol.19　223-232 頁．
西山哲治　1987 『子供の憧るる人形の國』 大空社（1918 年の復刻版）．
日本金属玩具史編集委員会　1997 『日本金属玩具史』 久山社（1960 年の復刻版）．
古城絵里香　2004 「婦人雑誌に見る雛人形　明治後期から昭和初期まで」『別府溝部学園短期大学紀要』Vol.24　13-19 頁．
増淵宗一　1996 「人形あそびの変遷 戦前と戦後」『教育と情報』Vol.454　14-17 頁．
松本孝次郎　1899a 「遊戯及び玩具」『児童研究』Vol.1-4　160-163 頁．
松本孝次郎　1899b 「遊戯及び玩具の心理的研究」『児童研究』Vol.2-1　13-16 頁．
三越　2005 『株式会社三越 100 年の記録』 三越．
柳田国男　1998 「小さき者の声」『柳田国男全集 7』 筑摩書房　99-207 頁．
矢野智司　2000 「教育の〈起源〉をめぐる覚書」『野性の教育をめざして　子どもの社会化から超社会化へ』 新曜社　47-68 頁．
山口昌男　2005 『「敗者」の精神史（上）』 岩波書店．
山田徳兵衛（十世）　1984 『日本人形史』 講談社．
山田徳兵衛（十一世）編　1991 『図説　日本の人形史』 東京堂出版．
湯川嘉津美　1984 「明治初期における西洋幼児教育の受容過程　ー万国博覧会を中心にして」『日本の教育史学』Vol.27　46-64 頁．

吉見俊哉 1992『博覧会の政治学』 中央公論社.
和田修二 1985 「戦後教育における科学主義と教育関係者の意識変革」『教育と超越』 玉川大学出版部 235-290頁.

The transformation of human development by means of objects in modern Japan: Concerning the example of a doll

KUBOTA Kenichiro

The purpose of this paper is to consider the transformation of human development by means of objects in modern Japan, taking into account a doll as an example. In modern times, children develop through interaction with things that are intended for children like toys. By this, the strategy of disposition can be said to work properly. Therefore, when people speak of objects for children, they do not speak without a view for education. In earlier times, dolls influenced human development by being an integral part of the Harai (purification) ritual during Sekku (a seasonal festival) and were considered have superhuman powers. With respect to modern human development, this inclusion was considered to nurture a spirit of sympathy and teach the importance of the family and nation. In modern times, a doll is entirely systematized; however, it still represents unheimlich objects for children. Therefore, as was the norm in the past, a doll can still influence human development in the present day.